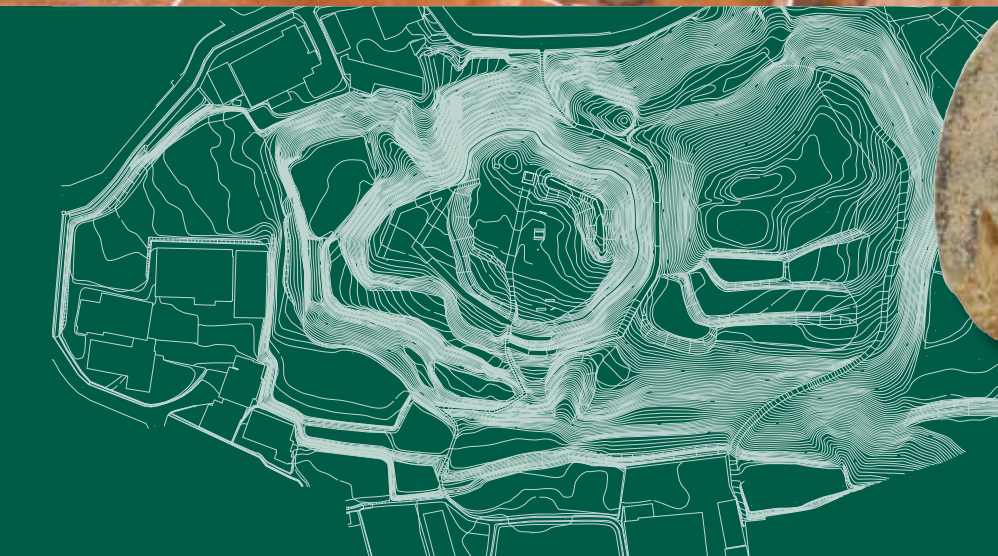


西尾市遺跡解説パンフレット

戦国・近世の西尾



西尾市教育委員会

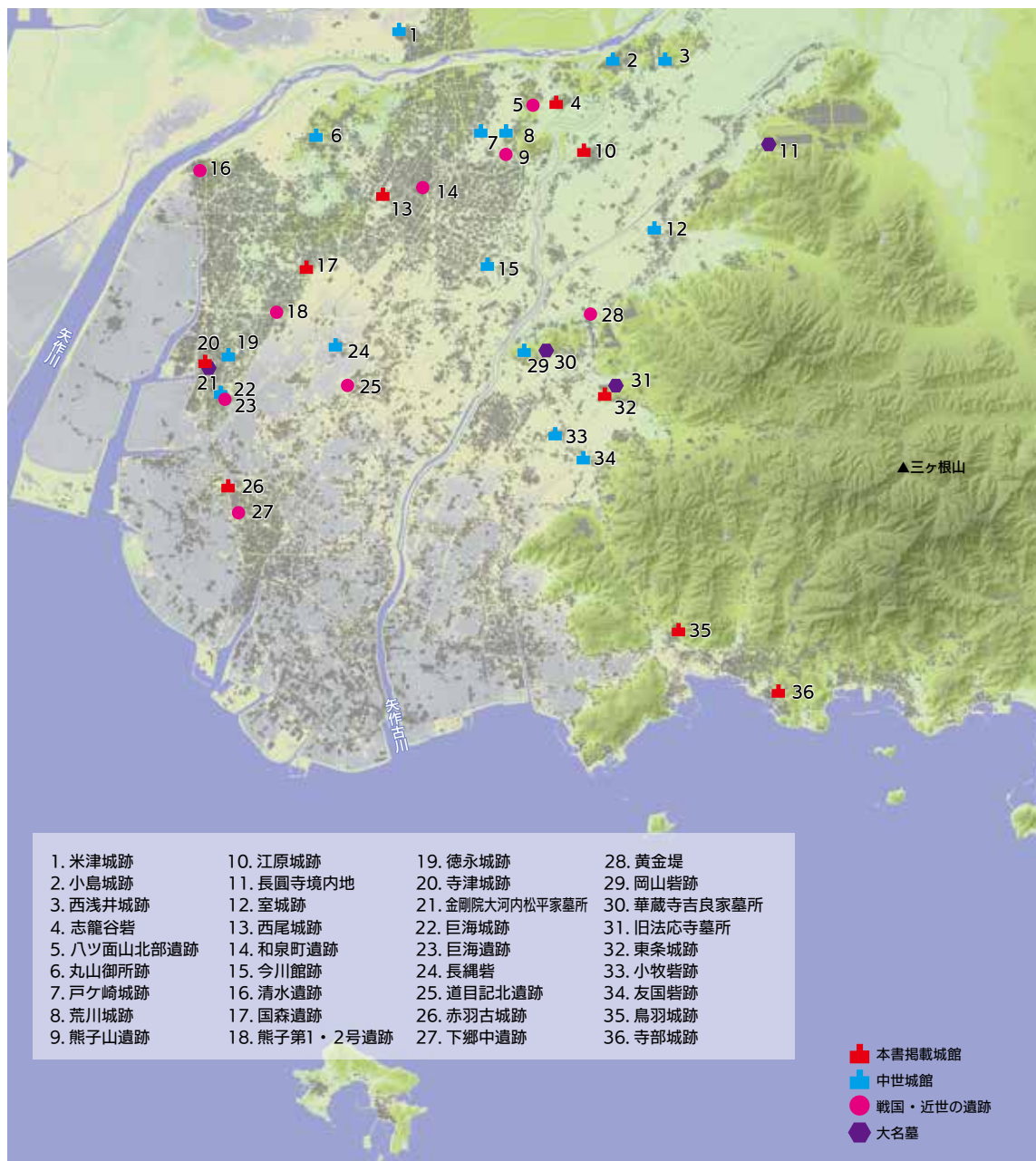
戦国時代

市内各地に築かれた城館や砦は60か所以上(推定・伝承含)を数えます。これらは在地領主らによってムラの中心や交通の要所などに築られました。多くは戦国時代の終焉とともに廃城となりますが、その一部では土塁や堀跡などの遺構が今日まで残されています。

西尾城では16世紀になると遺構・遺物が増加し、この頃から本格的に城郭の整備が行われたようです。その後、天正年間に行われた2度の大規模な改修によって、近世城郭へと移り変わっていきます。

近世(江戸時代)

江戸時代になると、譜代大名が西尾城主を歴任します。石高は2~3万石で、主に矢作川と矢作古川に挟まれた範囲(西尾地区・一色地区)の村々を所領しました。西尾地区の矢作古川以東や吉良・幡豆地区は、大多喜藩松平家小牧陣屋のほか、高家吉良家などの旗本領となり下永良陣屋・岡山陣屋などが統治を行いました。また、板倉家墓所(長圓寺)・大河内松平家墓所(金剛院)・高家吉良家墓所(華蔵寺)といった大名や旗本の墓所が先祖ゆかりの地に整備されました。



本丸丑寅櫓北側の石垣 (表紙右下) ※超広角レンズ使用

城内で最も良好な状態で残っている石垣です。堀上端から櫓台までの高さは約7mで、小形の石材が石張り状に積まれています。櫓台の高さは約3mで、やや大きな石材が用いられています。

西尾城東之丸跡出土の陶磁器 (表紙左下)

西尾藩の上級藩士の屋敷跡から出土しました。肥前窯産の染付磁器皿や香炉、三田焼(兵庫県)の青磁鉢(菓子器)など様々な種類のものが出土し、豊かな生活の様子を垣間みることができます。

表紙の写真 (上): 丸馬出(西尾城跡) P6 参照

(中央): 寺部城(寺部町)測量図/軒丸瓦・軒平瓦(西尾城跡)

※清水遺跡・黄金堤・鳥羽城写真提供: 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

戦国・近世の遺跡

くまご 熊子第1・2号遺跡(上矢田町)

市内でも有数の古刹の養寿寺の北側に広がる集落遺跡です。昭和51年、県道工事に先立って発掘調査が行われ、縄文～江戸時代の遺構・遺物が確認されました。戦国時代の井戸が1基見つかり、鍋や釜類などの日常品だけでなく、貝殻や魚骨(クロダイ・イシガメ)などの自然遺物も出土していて、戦国時代の生活を知る上で貴重な資料となっています。



出土した陶器類



井戸跡

やっおもてやまほくぶ 八ッ面山北部遺跡(八ッ面町・中原町)

長さ約1.5m、幅約0.6mほどの長方形または楕円形の遺構が24基見つっています。内部には炭化物や灰が堆積していて、内壁面が熱を受けて赤くなっています。これは人を火葬するための施設で、火葬が庶民層へも広がっていたことがわかります。市内では、熊子山遺跡(八ッ面町)・室遺跡(室町)などでも火葬施設が見つっています。



八ッ面山北部遺跡の火葬施設



熊子山遺跡の火葬施設

しみず 清水遺跡(中畑町)

市域西端の碧海台地に位置する遺跡です。台地端部で戦国～近世の大型土坑群が見つっています。土坑内からは石製鋳型や鉄滓が出土していることから、鋳物砂の採掘坑ではないかと考えられています。



大型土坑

こがねづみ 黄金堤(吉良町岡山)

貞享3年(1686)に吉良上野介義央の命によって築かれたと伝わる堤防です。現在の堤は大部分が明治以降の盛土によるもので、江戸時代には小規模なものであったことが判明しました。



堤断面

中世城館

鎌倉時代から戦国時代に築かれた有力者の館や城のことを指します。市内には西尾城以外にも、吉良家の家臣や在地領主によって60か所以上の城館が築かれ、各地の支配拠点としての役割を果たしていました。

その多くは、戦国時代の終わりとともに、廃城となります。今日まで往時の形状をとどめている城館もありますが、伝承のみで所在地が不明となってしまった城館もあります。

とうじょう 東条城(吉良町駁馬)

標高28mの丘陵上に承久年間に西条城(西尾城)とともに足利義氏によって築かれたと伝えられています。永禄4年(1561)、徳川家康は東条城主吉良義昭を降伏させ、代わって青野(東条)松平氏が入城しました。

今残る遺構は吉良氏滅亡後の東条松平氏の時代に整備されたものと推定されています。主郭を中心に複数の曲輪を階段状に配しています。主郭での発掘調査では、15～16世紀にかけての陶磁器類や土師器鍋などが出土していて、居館として機能していたことが伺えます。



手前の大きな空間が主郭となります。現在、櫓・城門は撤去されています。
城館遠景(南から／平成25年撮影)



矢印が主郭を囲む横堀(大堀切)城館遠景
城館遠景(南から／平成25年撮影)

てらべ 寺部城(市指定史跡／寺部町)

標高30mの丘陵上に築かれた中世城館で、主郭からは三河湾を一望することができます。市内でも特に遺構が良く残っている中世城館で、幡豆の海を治めていた幡豆小笠原氏の居城でした。

主郭の北側には土塁が残り、東側の郭との間には幅約15m、深さ8mの横堀(大堀切)、北西側には幅約8m、長さ10m以上の縦堀が残っています。いずれの堀跡も戦国時代末期の遺構と推定されます。丘陵南側で行われた発掘調査では中世の溝状遺構が見つかっていて、寺部城に関連した遺構と考えられます。

城と海との間には吉良と蒲郡を結ぶ街道が通っていて、水陸交通の要所であったことが伺えます。

中世城館を探す

土塁や堀跡などの地上からわかる痕跡が残る城跡は少なく、発掘調査や文献資料・地籍図の分析などによって往時の姿を明らかにすることもあります。

てらづ 寺津城跡(寺津町)

吉良氏の家臣、大河内氏の居城でした。現在は宅地化が進んでいますが、城の北西隅にあたる瑞松寺の裏に土塁が残っています。

寺津城は江戸時代に描かれた村絵図や地籍図などから城館の様相を伺い知ることができます。村絵図によると城館は東西21間、南北27間の方形で、道を隔てた南側に「御蔵」(兵糧米を蓄えるための蔵)があったとされます。



「寺津村絵図(部分)」(西尾市教育委員会所蔵)

とば 鳥羽城(鳥羽町)

東条城と寺部城とを結ぶ街道を見下ろす丘陵上に築かれています。市内では唯一、全面的な発掘調査が行われた中世城館です。主郭は一边が約24mの方形で、周囲に土塁を巡らせていました。南辺中央には喰い違い虎口が設けられていて、16世紀後半の築造と推定されます。発掘調査では遺物が少なく、生活痕もほとんど見つからなかったため、居城としてではなく軍事目的で築かれた砦と考えられます。



城跡全景(西から)



土塁断面(南から)

えわら 江原城(江原町)

矢作古川左岸の沖積微高地上に築かれた城館です。近年まで城館を囲んだ土塁が残っていました。土塁は微高地縁辺に築かれていて、低地部との比高を利用して防御性を高めていたと考えられます。

城跡の東100mには江原氏の菩提寺の妙喜寺があり、江原氏の位牌や五輪塔が残っています。城主と菩提寺との関連性がよくわかるとともに、沖積低地に築かれた城館の遺構が現存した事例として貴重です。



土塁全景(北から)



江原氏の墓塔

くにもり 国森城(国森町)

矢田ふれあいセンター建設に伴う発掘調査によって幅3m、深さ1.5mの堀跡が東西40m、南北20mにわたり確認されました。この堀は16世紀前半に掘削され、短期間のうちに埋められたと推定されています。文献資料にない在地領主の居館であったと考えられます。



堀跡遠景(南から)

しこや 志籠谷砦(志籠谷町)

荒川城の支城の一つで、土豪牧野氏が築いたとされています。発掘調査によって台地縁辺を巡る2条の大型の溝が確認されており、志籠谷砦の一部であった可能性があります。2条の堀の間で見つかった井戸からは戦国時代の鍋類が多く出土しました。



堀跡全景(南から)

戦国時代の西尾城

西尾城（錦城町）は承久年間の創建と伝えられています。中世の遺構・遺物はわずかであり、その実態はわかっていません。戦国時代になると、二之丸・東之丸では溝で区画された方形の屋敷地が連なった状態であったと想定されています。

戦国時代末になると丸馬出や障子堀など大規模な遺構が見つかって、より強固な城郭へ発展していったことが伺えます。

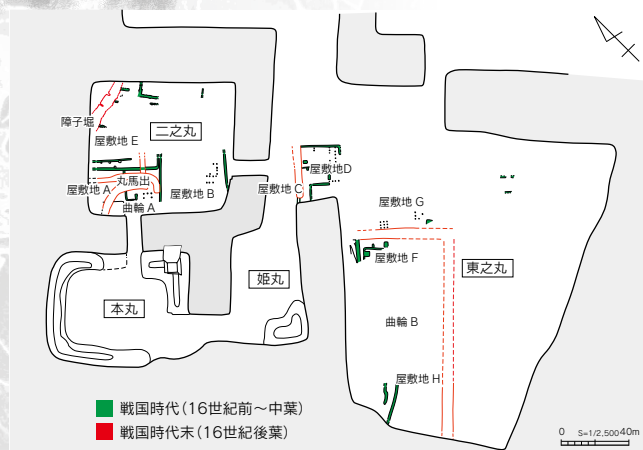
大量に投棄された土師器皿

土師器皿は、小型で素焼きの皿のことで「かわらけ」とも呼ばれます。宴席・儀礼の場などで使用され、一度使用すると廃棄されました。二之丸で見つかった土坑内からは宴席・儀礼で使用されたであろう大量の土師器皿が出土しています。



しょうじぼり
障子堀

二之丸天守台付近の調査で発見された幅7m、深さ3mの堀です。従来あった堀を拡張した際、地面の一部を障子の棧のように掘り残して障壁を設けています。障壁は堀内での敵兵の移動を妨げる役割があります。



戦国時代の遺構分布図

戦国時代の煮炊き具

城内で使われた鍋や釜といった煮炊き具で、肩部に取手が付く羽付釜（いわゆる茶釜）、口縁近くに鏝が付く羽付鍋、囲炉裏に吊るすための一對の釣り手が付く内耳鍋などの様々なタイプがあります。二之丸・東之丸跡からは多量の鍋類が出土していて、居住空間であったと推察されます。



まるうまだし
丸馬出

二之丸南側では丸馬出と考えられる弧状に掘られた2本の溝が見つかっています。丸馬出は本丸虎口に位置していることから、当時は本丸が西尾城の中心的な郭であったことが推察されます。



天正13年の大改修

『家忠日記』などには天正13年(1585)に徳川家康の命によって、西尾城の大改修が行われたことが記されています。丸馬出や障子堀はこの際に掘削されたと推定されます。

近世の西尾城

近世になると、譜代大名が歴代城主を務めました。発掘調査によって石垣や礎石などが確認され、絵図などに描かれた往時の姿が明らかになりつつあります。

本丸丑寅櫓礎石跡

櫓台の上面は約6.5m四方で、8か所の礎石を抜き取った跡が見つかりました。一部に地固めのための根石が残っていました。櫓台の北側と東側及び西側には石垣が積まれていました。石垣は野面積みで、隅角部の石垣は破壊されていました。



本丸裏門の石垣

石垣の構築方法を確認するための調査を行った結果、盛土の上に直接石を積んでいることが確認されました。石材の種類は花崗岩・泥岩(佐久石)など、近隣で入手可能な石材が使用されています。



天守台石垣

二之丸天守台の復元工事中に発見された天守台に付随する腰巻石垣です。石材は花崗岩で、野面積みされています。石材の下には沈下を防ぐためのマツ材が敷かれていました。



軒丸瓦(左:立葵紋/右:桔梗紋)

屋根の軒先部分に葺かれていた瓦です。瓦当の中央に三巴紋、その周囲に連珠を配した文様が一般的ですが、なかには城主の家紋をあしらった家紋瓦もあります。立葵紋は本多氏、桔梗紋は太田氏の家紋です。



いずみちょう 和泉町遺跡(和泉町)ー足軽屋敷跡ー

病院建設に伴って行われた発掘調査で、屋敷の周囲を囲む溝や井戸、廃棄土坑などがみつかりました。出土した陶磁器類は東之丸跡出土資料と比べ、遠隔地のものではなく、地元産陶器で占められていて、居住者の階層差が表れています。

～城下町の住民～

西尾城は城下町全体を堀で囲んだ総構そうがまえといわれる構造となっています。城下町には武士だけでなく、商人・僧侶・農民など様々な人が居住していました。



江戸時代の和泉町付近の図
(『西尾図』/西尾市岩瀬文庫蔵)
黄色い丸の範囲が和泉町付近。すぐ東側の台地下には外堀が巡っています。



平成15年調査区全景(南から)
近世の井戸や溝跡などが見つかっています。井戸は7基確認されていて、繰り返し掘られていたことがわかります。

大名墓所

江戸時代、各藩に配置された大名各家は、移封とともに墓所も移るのが一般的です。しかし、市内には多くの譜代大名・旗本の本貫地があり、先祖ゆかりの地に墓所が構えられています。

ちょうえん じ いたくら け

長圓寺板倉家墓所(市指定史跡／貝吹町)

初代京都所司代を務めた板倉勝重を祀った肖影堂の周囲に、板倉六家の歴代当主の墓塔などが佇んでいます。禅堂跡の確認調査では、天明8年(1788)の火災跡とみられる炭化物層の上に新たな盛土を行って、建物が再建されたことが確認されました。



肖影堂と墓所



禅堂跡発掘調査の様子

け ぞう じ き ら け

華蔵寺吉良家墓所(市指定史跡／吉良町岡山)

江戸幕府の高家を務めた吉良義弥・義冬・義央など歴代吉良家当主の墓や親族らの墓が建てられています。吉良家は旗本でしたが、東伊豆産安山岩製の関東式宝篋印塔は大名家にもひけをとらない格調高い墓塔です。



墓所近景



義弥墓塔



義冬墓塔

こんごういんおおこう ち まつだいら け

金剛院大河内松平家墓所(市指定文化財／寺津町)

大多喜藩大河内松平家の祖松平正綱が先祖の居城であった寺津城跡に金剛院を建立し、祖父母である信貞・信貞夫人と父秀綱の墓塔を整備したようです。東伊豆産安山岩製の3基の関東式宝篋印塔と、正綱以降の藩主7基の笠付型墓塔が立ち並んでいます。



秀綱・信貞夫人・信貞の宝篋印塔

旧法応寺墓所(吉良町駿馬)

天正11年(1583)に没した松平(松井)忠次墓・顕彰碑・東条松平氏墓(松平忠茂・松平家忠など)が残されていました。開発工事のため現在、墓塔は花岳寺に移設されています。忠次墓の下面からは常滑窯産の大甕が見つかり、内部には遺骨が納められていました。



墓所近景(平成23年撮影)